○我國への粟の傳來方向（藤田安二） Yasuji FUJITA: From where *Setaria italica* came to Japanese Islands ?

粟の起源は北支であつてエノコログサ (*Setaria viridis* Beauv.) から出たものとされている。[1] 山西省萬泉町荊村の仰韶文化遺跡にこの遺物が見出され[2]，又歐州新石器時代の瑞西の水邊杙工居遺跡内にも粟が見出されているから，この時代に既に西方に傳播したものと考えられる。この際中央アジアから印度のパンジャブ地方へも傳わつたらしく，これは印度に野生が無い事，パンジャブ地方で古くから栽培された事，Sanskrit に Kungoo, Priyoungo 等[3]と言う古い獨特の呼稱がある事によつても想像される。

前報[4]に於て著者は古事記中の數種の植物名を取上げ，古事記の神話は粟の我國への渡來を示し，臺灣 Puyuma 族の Dawa, フィリッピン Tagalog の Dawa, ジャバの Djawa woet と連關し，南方よりのものなる事を主張した。今再びこの問題を取上げるが，先づ南方に於ける Dawa 系の *Setaria italica* の土名を擧げれば次の樣である。

スマトラ[5] Batak: (Djaba ikoer (koro), Djaba oeré (Toba); Maleid: Djawa (Palemban). **スンダ諸島** Sunda: Djawa woet; Java: Djawa Woet; Madura: Djhaba; Kangean: Djhabalek; Bali: Djawa semi, Djawa woet. **ボルネオ** Dajak: Djawaé (Nangah). **フィリッピン**[6] Cebu Bisaya: Daua; Panay Bisaya: Daua; Tagalog: Daua. 臺灣[7] Puyuma: Dawa, Zawa.

さて沖繩，日本に於ては Awa であるが，アイヌにては Piyapa, Kiyapa[8]と言う。

宮部氏[9]によればアイヌはヒエもPiyapa, Biyaba と呼び，インドネシアに於てもモロコシ，ヒエ等を Dawa 系の言葉で呼ぶ處が多い[10]。一方印度に於ては大麥を Sanskrit にて Yava, Yuva, Jav と呼び，Bengal にては Juba と呼ぶ。[11] Kern によればイラン語並にアフガニスタン語にても大麥を Jav と言い，バルチック海岸のリトアニアにては Java を以て一般穀類を指す[12]。

この事からすれば Java とは一般に穀類を示す極めて古い言葉であつて[13]，その起源は中央アジア方面の樣に考えられる。

なお印度ではコキビ (*Panicum miliare* Lamk.) を Kungu 又は Sàva と呼ぶが[14]，この Kungu は粟の Sanskrit 名 Kungoo に一致し，Sava は Yava に甚だ近い。又馬來パハン・ケランタン兩州の境に行われる Sakai 語の一方言テンビ語では粟を Sekoi-jawak と言うが，Sekoi, Sekui[15]は馬來で一般に粟を示す言葉だから，この形は一種特別である。

次に *Setaria italica* の土名としての Awa 系語の分布を示せば第1圖の樣である。

かくの如く中央アジアに起源を有すると考えられる一般穀類を示す極めて古い呼稱 Java は印度に入つて主として大麥を示す言葉となり，スマトラ，ジャバに出てはじめて主として粟を示す言葉となる。これはこの方面の呼稱が色々の形容詞を有する事でも分る事で，馬來の古族 Sakai の一部が粟を Sekoi-jawak と言うのはなおこの Jawak

第1圖　アハ系語彙分布圖

は一般穀類を示すものである。然るにボルネオの Dajak にては Djawaé のみとなり，フィリッピンに到つて Djawa 系より Dawa 系の發音となる。臺灣 Puyuma にては全く同樣に Dawa, Zawa であつて D, Z は音聲的にはあまり差の無いものである。かくして沖繩及び日本の Awa はこの臺灣，フィリッピンの Dawa に直連し，明かに南方系である。更にアイヌが粟其他の穀類を Piyapa, Kiyapa, Biyaba 言とうのは一層興味ある事で，一般穀類を示す古稱 Yava に最も近く，その源流は中央アジア迄も遡る。この事は東亜の孤立民族アイヌの起源が中亜であつて，印度より南海に出で，更に北上したものなる事を示すものと著者は考える。

アイヌの物質文化の性質がこの民族の南方起源のものなる事を示すと言う主張はSternberg[16] によつても提出されており，又 Gjerdman[17] が1927年，70語以上のアイヌ語とマラヨ・ポリネシア語との類似語彙を擧げ，アイヌ語と南洋語とが昔或地點で接觸した事を證據立るならんと言い，アイヌ語と南洋語との接觸は極めて古代に遡り，マラヨ・ポリネシア語分裂以前であると論じ，兩語共通語中にモンクメル語とも一致するものあるを認め，アイヌ語が南洋語の影響を受けたのは極太初で印度支那かまたはその附近の地點に於てであろうと臆測しているのは著者の考えを完全に裏書きする。

更にアイヌが西歐ピレネーの孤族 Basque 族とも類緣を有すると言うのは[18]，この近緣古族が中亜に存するかつての共通の發生地から別々に分れて移動し，その西方に向つたものの殘存が Basque 族であり，南下して印度より印度支那方面を經て海に出で，島づたいに北上したものの殘存がアイヌであると考える事によつてのみ理解出來る。かくして我國に於ける Awa の呼稱こそアイヌに次いで南方より北上渡來した日本先住民族（原日本人）の呼稱であつたのである。　　(1952. 2. 21.)

文　献　1) 北村：東方學報，**19**，: 83 (1950).　2) 小野：日本農業起原論：68, 124 (1942).　3) Roxburgh: Flora Indica: 101 (1874).　4) 藤田：臺灣博物學會會報，**30**: 246 (1940).　5) Heyne: Nutt. Plant van Nederl. Ind., **1**: 236 (1927); Clerg: Niew plant woordenboek voor Nederl. Ind., 201 (1927).　6) Merrill: Dic. Plant names of the Philipp. Isl., 184 (1903); Enum. Philipp. Pl., **1**: 73 (1925).　7) 小川：原語による臺灣高砂族傳說集，附錄 25, (1935); 堀川：臺灣に於ける有用植物：21, (1920); 佐々木：臺灣植物名彙：62 (1928).　8) Batchelar: Ainu Eng.

Jap. Dic., 375 (1926). 9) 宮部: 植研誌, **24**: 2 (1949). 10) 鹿野: 東南亜細亜民族學, 先史學研究, **1**: 298 (1940). 11) Roxburgh: Flora Indica: 120 (1874); Watt: Comm. Prod. Ind., 640, (1908). 12) 馬淵: 新亜細亜, **4**, 3 月號, 136 (1942). 13) Monier-Williams: Sanskrit-Eng. Dic., 847 (1899). 14) Watt: Comm. Prod. Ind., 845 (1908). 15) Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Penn., 1999 (1935). 16) Sternberg: *Anthropos*, **24**: 755 (1929); Sayce (坪井譯): 未開民族の文化: 32 (1942). 17) 松本: 古代文化論, 現代史學大系, **10**: 99 (1932). 18) 三品: 日本の黎明, 京大日本史, **1**: 21 (1951).

(通産省大阪工業試驗所精油研究室)

○イチシとイタドリとの關連 (前川文夫) Fumio MAEKAWA: Etymological notes on Japanese names of *Rumex*, *Reynoutria* and *Patrinia*.

最近牧野博士は混々錄 No. 11 (1952) を久々に再刊されて大いに氣を吐かれたが, その中にイチシの語源についても亦新見解を述べておられる。(同誌: 204—208) 一體イチシとは何か, 壹師の花とも書き萬葉集 11 卷の「みちのべのイチシノ花のいちじろく(灼然), 人みな知りぬ吾が戀づまは」の歌に殘つているだけで外には何も手掛りが殘つていないため, いまだに正體がいろいろと詮議されている植物である。もつとも現存六帖に「立つ民も衣手白しみちのべのイチシの花の色にまがえて」の歌もあるが, これはイチシの花を白い花とした上での使用だから直接の解決には使えない。

從來のイチシの本體を示す植物としてはいちじろくを白色と取り, 白い花を連想してクサイチゴ (仙覺抄, 小清水氏), エゴノキ (白井博士), そして別に羊蹄 (シ) の花即ちギシギシの花 (八雲御抄, 啓蒙, 大言海など) を宛てゝいるが, どうもぴつたり來ない。牧野博士は灼然から赤色を, そして赤色の花で眼覺める許りのものとしてヒガンバナを想起し, 大和の地名市磯 (イチシ) の池をも織り込んで確信を以て主張されている。私はこれにも亦釋然としない。それで從來から得ていた考えを述べて御批判を得ようと思う。私の結論をいえば, **イチシはイタドリである**。そしてこの名は當時既に存在していた幾通りかの他の植物名と共通の構成內容を持ち, その命名動機も亦同じような基盤即ち生活の中に大きく位置を占めた利用價値の上に立つていたとの線に沿つて展開が試みられたのである。

イチシは恐らくイチ+シの二語の合成であろう。この事は廣義のシなる植物群をイチの區別用語を冠して分類し識別したところに出發する。シは古く羊蹄の文字を宛てたが, 食用とする點から *Rumex* (主としてスイバ, ギシギシ) の黃色の太い根莖を持つものを指した。これをどうしてシといつたかは推定の範圍だが, 酸味に富む若葉を持つ根莖を重點にしてスノネ (酸之根) にはじまり, シノネと轉じ, 逆に植物名に根の名がついたものと錯覺されてこの植物群がシとなつたのであろう。シドネ→シドウ→スイトウ (關